公益財団法人　http://www.jkcf.or.jp

日韓文化交流基金NEWS

2019.3.25 No. 89

Contents

1　日韓交流のさらなる広がりを目指して
第1回 大学生訪韓団アルムナイ（OB･OG会）を開催

2-3　知日・知韓家育成事業
「年末らしい？ らしくない？」毎日新聞論説委員　大貫 智子

4-5　基金講演会
平田 オリザ氏講演「文化と文明―わかり合えないことから」

6　歴史家会議
第18回日韓歴史家会議「国際関係―その歴史的考察」

7　交流エッセイ
「都立桜修館中等教育学校の国際理解教育」
東京都立桜修館中等教育学校　校長　鳥屋尾 史郎

8　助成事業紹介
東京デスロック+第12言語演劇スタジオ『가모메카르메기』
東京デスロック主宰　多田 淳之介

9　企画公募事業紹介
「生涯スポーツで街を元気に！地域づくり魅力発信事業」
公益社団法人　北海道国際交流･協力総合センター　小田島 道朗

10-11　事業報告
青少年交流事業
学術定期刊行物助成
国際ポエトリー交流プログラム（IPEP）訪日団

12　青少年交流事業
韓国青年訪日団団員と日韓未来塾メンバーとの交流

日韓交流のさらなる広がりを目指して

第1回 大学生訪韓団アルムナイ（OB･OG会）を開催

2018年12月15日（土）に第1回大学生訪韓団アルムナイ※が開催され、OB･OG会組織（JKAF：Japan Korea Alumni Forum）が結成される運びとなりました。

※「アルムナイ」（alumni）はラテン語を語源とする英単語alumnusの複数形で、「卒業生、同窓生、校友」を意味します。

当基金では、1989年より30年にわたり大学生訪韓団事業を行っており、これまで12,000人を超える青少年が参加しましたが、2018年9月に実施した大学生訪韓団の団員より、「過去の訪韓団参加経験者と交流する場を設けてほしい」という声があがり、このたび「第1回訪韓団アルムナイ」を当基金会議室にて開催しました。当日は、久しぶりの再会を喜び、訪韓団当時の思い出を振り返りながら談笑する様子や、他団団員との話に花を咲かせる様子が見られたほか、グループ対抗の韓国クイズ大会では、互いの知識を出し合いながら協力して回答するなど、団の垣根を越え、たいへん盛り上がりました。

また、会の終盤には、「今後もこのような集まりを開催しながら、後輩となる訪韓団団員への支援や、韓国からの訪日団との交流会を行いたい」という意見が多数あがりました。こうした声を具体化させるため、大学生訪韓団経験者主導でOB･OG会組織（JKAF：Japan Korea Alumni Forum）が結成されました。初代会長に就任した渡辺一花さん（東洋大学3年）は、「訪韓団への参加をきっかけに、日韓関係についてより深く考えるようになりましたが、それだけでは物足りず、もっと目に見える形で貢献したいと思い参加を決めました。この活動を通じて、学生や社会人の垣根を越え、訪韓団経験者として日韓のさまざまな面について考え、たくさんの人と触れ合っていきたいと思います」と、今後の活動への意気込みを語っていました。

第1回アルムナイには、訪韓団OB・OGの社会人及び現役大学生31名が集まりました。

こちらの取り組みについては、次号で詳しく紹介します。ご興味のある方は、jkafsecretariat@gmail.comまでご連絡ください。

詳しくはコチラ

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒101-0061　東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790　fax. 03-6261-6780

年末らしい？　らしくない？

毎日新聞論説委員　大貫 智子

2018年度から始めた「発信力を有する知日・知韓家育成事業」の採用者として、2018年12月末に訪韓し、「韓国における対北朝鮮観の変化」をテーマに研究された大貫智子氏の滞在報告を紹介します。

「マイナス14度」の現場

ホテルを一歩出た瞬間、耳が痛くなった。「ネイバー」の天気予報を見ると、最低気温はマイナス14度。ああ、冬のソウルに来たのだ。現場感を全身で味わった。

私は特派員として2013年4月から5年間、ソウルに滞在した。3年6ヵ月もの間首脳会談が開けなかった「過去最悪」の日韓関係、朴槿恵政権を揺るがしたセウォル号沈没事故、そして憲政史上初の大統領弾劾、繰り上げ選挙により文在寅大統領が当選。韓国について多少、理解していると自負するには十分すぎるほど大ニュースに直面した。

それだけに、帰国が決まった時点で、ある他社の先輩記者がかつてつぶやいた一言が私を不安にさせた。

「特派員は現場を離れた瞬間から、その国のことは分からなくなってしまうんだ」

この記者がソウルを離れる直前、日本メディアが一堂に会した送別会でのこと。彼はこれが二度目の韓国赴任だった。帰国すれば誰もが「ソウルは遠くなりにけり」となるものだ。物寂しげな表情が物語っていた。

そうはなるまいと、私は昨春の帰国後、できるだけ朝鮮半島に関する情報に触れるようにした。通勤電車の中では「聯合ニュースTV」をはじめ韓国メディアをチェック。韓国の友人、知人たちとは毎日、カカオトークでメッセージをやりとりした。それでも人々の何気ない日常会話を耳にしていた当時とは違う。空気をつかみきれない。あの先輩記者の一言が重くのしかかり始めていた。

日韓文化交流基金の支援プログラムを知ったのは、そんな時だった。論説委員は本社で社説の方向性について議論するのが仕事のため、朝鮮半島を担当しているとはいえ海外出張の機会は滅多にない。それが「最短で2週間」も滞在できるという夢のようなプログラム。まさに願ったりかなったりであった。

それではと、息子の学校の冬休みに合わせて年末年始に向かうことにした。韓国の大型連休は旧正月のため、この時期でも通常通り取材は可能だ。

研究テーマは、平昌五輪を舞台に始まったこの1年間の南北融和ムードに対して、韓国の一般市民がどう受け止めたかという内容に決めた。日本では、韓国はすっかり北朝鮮に夢中になっているというマイナスイメージが広がっている。しかし恐らく、必ずしもそうではないだろう。多様な韓国の姿を日本に伝えたい。それが相互理解の一助にもなるのではないか。

そんな思いで、韓国政府関係者や大学教授らに連絡すると、「ソウルに着いたら電話して下さい」と韓国らしい答えが返ってきた。事前にかっちり予定を決めないのは気軽に会える親しさの証。出発前、空白の多かった手帳は、到着して2日ほどであっという間にぎっちり埋まった。

滞在期間は2週間と限られている。時間が惜しく街に出てみると、気のせいか人通りが少ない気がした。寒波のせいもあるだろうが、忘年会シーズンである。光化門で夕方、人影がまばらというのは、昨年までとは様子が違うのではないか。

光化門の夕刻。人影はまばらだった。（2018年12月28日：筆者撮影）

目立つ空き店舗

年が明けて会食した旧知の与党・共に民主党の関係者は「昨年末は、年末らしくないという言葉をよく聞いた」と話した。例年なら1カ月前の予約が必須の飲食店が、ダメ元で連絡してみると前日でも空席があったというのだ。施行から2年余りが過ぎた「金英蘭法」※や働き方改革の影響だけではない。景気の悪さを反映して、人々が外出を控えているのだろうと彼女は分析した。「最近、よく店を閉め

ているのは美容院だそうですよ」と先行きの暗さに顔を曇らせた。確かに三清洞や新沙洞を歩いてみても「賃貸」の空き店舗が目立つ。

※「不正請託及び金品の収受禁止に関する法律」の通称。2016年9月施行。

汝矣島を拠点とする韓国の大手紙記者によると、証券街に衝撃が走ったのは昨年10月末のことだった。サムスン電子の株価が4万400ウォンの年初来安値をつけたのだ。業績は好調で、数日後には第3四半期の連結営業利益が前年同期比21%増と発表しているにもかかわらず、である。

彼が送ってくれた株価の推移表を見ると、2018年下半期の下落ぶりは一目瞭然だった。6月に5万ウォン台前半を維持していたのが、年末には3万8700ウォンまで落ちていたのである。これはサムスンにとどまらず、現代自動車やLGなど韓国を代表する企業も同じ傾向だという。「世界的に落ち込んだ時期ではあるけど、韓国の落ち幅は顕著だった。米中貿易摩擦の影響で、韓国の製品が中国で売れなくなったから」。なるほど説得力のある解説だった。

こうした話はデータで裏付けられている。韓国ギャラップ社が1月18日に発表した今年の経済展望に関する調査では、今年景気が良くなるかとの問いに対し、「良くなる」は17%に過ぎず、「悪くなる」が49%と半数近くに上る。失業者についても「増加する」が56%に達したのに対し、「減少する」は16%に過ぎない。就任3年目に入り、任期の折り返しを迎える文在寅政権にとって、今年は文字通り正念場の1年と言えよう。

「韓日関係が心配」

一方、日韓関係においてはここ数年の「年末恒例のジンクス」が今年も破られることはなかった。

西欧のようにクリスマスの大型休暇がないせいなのか。ここ数年間、不思議と年末になると両国の間では歴史的な出来事が起きていた。2015年は慰安婦合意、2016年は釜山の日本総領事館前の少女像設置、そして2017年は慰安婦合意に関する韓国外相直属の作業部会報告書発表。2018年は秋以降、元徴用工への賠償命令や慰安婦財団の解散によって既に激震が走っていたため、私の滞在中は穏やかに過ぎるのではないかと楽観していたが、出発直前になってレーダー照射問題が浮上した。それは思いの外長引き、大きな影を落とすことになった。

「韓日関係が心配です」。10カ月ぶりの再会を歓迎してくれた青瓦台関係者は、私が南北関係に関する取材で来たと聞いたうえで、こう切り出した。年末年始最大のニュースは、確かに北朝鮮より日韓関係のさらなる悪化であった。

彼は、レーダー問題で防衛省が現場の映像を公開したのは安倍晋三首相の指示だそうじゃないかと不快感をにじませた。徴用工問題でも、司法の判断を尊重せざるを得ない韓国の立場を理解してほしいと力説する。「息子さんにどうぞ」と青瓦台のロゴ入りの文房具を手土産に用意してくれる温かさに感謝しつつ、別れた後の足取りは重かった。

研究テーマをあえて南北関係とした理由の一つは、日韓関係の展望があまりに暗かったからだ。しかしやはりというべきか、取材先での話題は自然と日韓関係に及んだ。前向きにとらえれば、それだけ深刻に考える人がいるという証左でもある。

今回の訪韓中、知人から「一緒にお互いの国民に広がっている誤解を解いていく努力をしよう」と提案を受けた。東京に戻った今、プロジェクトの具体化に向けて議論を始めたところだ。

氷がすっかり解け、柔らかな日差しとともに川沿いに咲き誇る漢江の桜を思い浮かべてみる。春の訪れはもうすぐ。少し心が軽くなった。

地下鉄駅構内の自動ドアに、3・1独立運動の功労者が描かれている。100周年の今年、日韓関係は一層厳しくなりそうだと予感させた。（2019年1月3日：3号線安国駅：筆者撮影）

PROFILE　大貫 智子（おおぬき ともこ）

毎日新聞論説委員。早稲田大学政治経済学部卒。2000年毎日新聞社入社。前橋支局、政治部、外信部を経てソウル支局へ。韓国では警察庁外事協力諮問委員（2017年）などを務めた。朝鮮日報紙上で、子育て中の女性記者同士が語り合う「金美理と大貫のフライデートーク」（2017年6月～2018年9月）を担当したほか、『中央サンデー』（『中央日報』日曜版）で2015年10月～2018年3月、コラムを執筆した。

基金講演会

文化と文明 ーわかり合えないことからー

劇作家／演出家／日韓文化交流基金評議員　平田 オリザ

今年度第２回目として、１月22日に開催された基金講演会「文化と文明ーわかり合えないことからー」（講師：平田オリザさん）の内容を紹介します。

私は1984年から85年にソウルの延世大学校に留学し、プロの劇作家になってからは、これまで、数多くの日韓共同制作の作品を創ってきました。

演劇「その河をこえて、五月」2002年6月公演　撮影：谷古宇正彦　提供：新国立劇場

2002年日韓国民交流年記念事業『その河をこえて、五月』のお花見のシーン。本作品は日韓両国の国立劇場による合同作品で、両国で大きな賞を受賞しました。

代表作でもある『東京ノート』での一場面。本作品は、2000年代に『ソウルノート』に翻案されロングランを続け、今年も日韓仏の合同公演などの企画を進めています。

一方で私は、小・中学校の国語の教科書を作るお手伝いをしてきたので、今も大体年間で30校から40校ぐらいは小・中学校で、演劇を使ったコミュニケーションの授業もしています。大学でも、いつもワークショップ形式の授業をしています。

そのなかでも一番古くから使っているのが「列車の中で他人に声をかける」という題材です。

知り合いのAさんとBさんがいて、そこに入ってきたCさんにAさんが「旅行ですか」と声をかけるというものです。簡単に見えるのですが、高校生などには意外に難しくて、妙に馴れ馴れしくなってしまったり、逆に一所懸命聞いてしまったりします。最初のうちは理由がわからなかったので、高校生たちに「どうして？」と聞いていました。そうすると「僕たちは初めて会った人と話したことがないから」と言う。要するに他者との接触が少ないということです。

中学校で演劇を使ったコミュニケーションの授業の様子

大学でのワークショップ形式の授業を行う様子

だいたい日本では、自分から話しかける人は１割くらい。過半数は話しかけない。そして残りは「場合による」という人たちです。これが英語圏では、イギリス以外のオーストラリアやアメリカ、カナダは、やたらと話しかけてきます。おそらく、開拓からの歴史が浅くて、自分が安全な人間だということを早くアピールしなきゃいけないような風土が残っているのではないかと思います。

アメリカでは、エレベーターで他人と乗り合わせて無言ということはない。日本人は、エレベーターに乗るとみんな上の表示を見る。では、アメリカ人はコミュニケーション能力が高くて、話しかけない日本人はコミュニケーション能力がないのでしょうか。そういう話でもない。これは文化の違いです。アメリカという多民族国家は、自分が相手に敵意を持っていないことを、声や形にしてはっきり表さないとストレスが溜まってしまう社会です。日本人は島国でのんびり暮らしてきたので、そういうことを声や形に表すのは野暮だという文化です。

日米では、緊張する場面が逆になっていることが分かります。これは文化の違いですから良し悪しではないし、優劣でもない。ただ、日本人はこのままでいいのかというと、そうも言っていられない。これからは日本にもたくさんの外国出身の方たちに住んでいただかなければならない。日本人もどんどん海外に出て行き、そして日本人の間でも価値観が多様化していく。今までのように「日本人ならわかってよ」ということだけでは、やっていけなくなるだろうと思います。

私は教育に関わっていますので、学生一人ひとりが今、そして十年後にどんなグローバル・コミュニケーションスキルが必要なのかということを見ていってあげなければならない時代だと考えています。

私はよく、「文科省が言うグローバル・コミュニケーションなど恐るるに足らずだ」と言います。あれはアメリカン・コミュニケーションだと。それは「アメリカに行ってホテルに泊まったら“Hi, How are you?”と言っとけ」というように覚えとけばいい。マナーとして覚えとけばいいのです。コミュニケーションの8割方は、文化に根差したマナーです。

ほんとに君たちが恐れないといけないのは、文化、コミュニケーションの多様性の方なんじゃないかと。アメリカでは“Hi, How are you”と言わないと失礼になる。しかし同じ英語を使っていてもイギリスのある階級では話しかけたら失礼になる。こんなことを全部覚えておくことなんてできない。だとしたら、人間にとって大事なのは、他の国のコミュニケーションに対する好奇心と、謙虚さだと思うのです。この好奇心と謙虚さこそが、本当の意味でのグローバル・コミュニケーションスキルなのではないか。

日本語と韓国語は、共に敬語が発達していますから、相手との関係が決まらないと中々話しかけにくい。特に韓国語は、年齢による敬語が厳しい。ですから韓国の方と会うと本当に困るんです。この人、私より年上だったかな年下だったかなと、これを間違えると失礼なことになる。そこで、韓国語の場合には、早い段階で、挨拶のすぐあとぐらいに相手の年齢を聞くという習慣があります。

韓国に行った日本女性たちが、現地の男性からいきなり年齢を聞かれて不愉快な思いをしたという報告がよく政府観光局に届くそうです。でもこれは仕方がない。年齢を聞かないとコミュニケーションが始まらない言語体系になっているからです。このように、話しかけるという行為1つとってもお国柄とか民族性、国民性というものが現れます。

さて、私たちは一人一人、話し言葉の個性というものがあります。話しかけるかどうかも、言葉から受けるイメージも様々です。こういうものを社会言語学では「コンテクスト」と呼びます。先程問題にしたのは「旅行ですか？」という簡単な台詞ですが、高校生がやると上手く言えない。当然なのです。高校生の95パーセントは話しかけないと答える。だからこれは簡単に見えるけど、その子の「コンテクスト」の外側にあるわけです。その子は普段使っていない言葉だということです。こういうものを私は「コンテクストのズレ」と呼んできました。これは「コンテクストの違い」に比べて、意識がしづらい分、落とし穴になりやすいのではないか。

異文化理解も同じです。例えば近年、日韓・日中の関係はギクシャクしています。ただ、どこでも隣の国とは仲が悪い。領土問題などもあると思うのですが、もう一つには、文化が近すぎるということもある。例えば私たち日本人は靴を脱いで人の家に上がるときに、揃えて反転させる。これを韓国では結構嫌がる方が多い。韓国の方からすると「早く帰りたいのか」と思うそうなのです。しかしこれは靴を脱いで家に上がるという文化を共有してるから起こる摩擦です。靴を揃える、反転させるというのは日本固有の「文化」で、あれを美しいと思うのも日本人だけです。しかしこれが、「揃えたほうがきれい」ぐらいならいいのですが、「揃えたほうがきれいに決まってる」となると思考停止です。決まってはいないから。日本人以外は全くそんなことには関心がないわけです。もしこれが誰にとっても便利だったり、美しかったりすれば、これは文化ではなくて「文明」になって民族や国境を越えていきます。

例えば漢字というのは、とてつもなく便利だったので中国人だけではなく韓国人も私たち日本人もベトナム人も文法はまったく違うけれども漢字を採用しました。これは文明です。しかし文化は固有の美的感覚ですから、他者に強要することはできないんです。これを強要しようとすると「文化侵略」になってしまう。もう一つの問題点は、欧米の方が靴を脱ぎ散らかしたときに私たちはあまり不愉快にはなりません。それは相手がそのルールを知らないことを私たちは知っているからです。「コンテクストの違い」です。

でも、なまじ靴を脱いで家に上がるという文化を共有していると、当然相手も同じ行動をとると思ってしまいます。「コンテクストのズレ」です。そして同じ行動をとらないとそれが野蛮に見えたり、悪意があるように見えたりする。だから近い文化の時ほど誤解が起きやすい。学生たちによく言うのは、若いうちにたくさん国際交流をして、やはりズレに見えるけれど違いなんだよねと、まず認識することが大事なのではないか、ということです。私は韓国とはもう30数年のお付き合いです。けれども最初の10年、韓国の人が、日本人が靴をそろえるのを嫌がることを知りませんでした。韓国の人も「なんで揃えるの？」とか、いちいち言いません。そういうものが積もり積もって、あるとき領土問題などが出てくるとバーって広がっていく。だから、やはりきちんと顕在化させていった方が、その時は角が立つかもしれないけれど、最終的に大きな衝突を回避できるのではないかということです。最初はよくわからないところから出発する方が良いのではないかということです。

司馬遼太郎さんは生前、「日本は文化は生み出せても文明は生み出せない国だ」と繰り返し書いていました。文明を生み出せるのは、中国やアメリカのような多民族国家だけで、文化がせめぎ合う中から文明が生まれるのだと。これからはグローバル化の中で、東アジア全体が一つの多文化共生圏となっていくでしょう。そのときに大事なことは、自国の文化を大切にしつつ、それを他国に押しつけない。他国の文化からお互いに学ぶ姿勢だと思います。

その点、まだ日本は、アジア唯一の先進国ではなくなったという事態を受け入れられない。韓国は先進国となったことに、まだ慣れていない。お互いの国と社会の、一層の成熟が求められるのだと思います。

PROFILE 平田 オリザ（ひらた おりざ）

劇作家・演出家・青年団主宰。

こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督

1962年東京生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。1998年『月の岬』で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞、最優秀作品賞受賞。2002年『上野動物園再々々襲撃』（脚本・構成・演出）で第9回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。2002年『芸術立国論』（集英社新書）で、AICT評論家賞受賞。2003年『その河をこえて、五月』（2002年日韓国民交流年記念事業）で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。

大阪大学COデザインセンター特任教授、東京藝術大学COI研究推進機構特任教授、四国学院大学客員教授・学長特別補佐、京都文教大学客員教授、（公財）舞台芸術財団演劇人会議理事長、埼玉県富士見市民文化会館キラリ☆ふじみマネージャー、日本演劇学会理事、（財）地域創造理事、豊岡市文化政策担当参与、岡山県奈義町教育・文化の町づくり監。

第18回日韓歴史家会議「国際関係―その歴史的考察」

2018年11月16日から18日までの3日間、東京・お台場で、18回目となる日韓歴史家会議が開催されました。

この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足しました。日本史、韓国史のみならず、多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告および、これに基づく意見の交換を行っています。

今回は、現在大きな転換期に直面している国際関係を歴史学の立場から検討すべく、「国際関係―その歴史的考察」と題する全体テーマの下に、日本側から19名、韓国側からは9名の歴史家が参加しました。「ヨーロッパにおける国際関係の成立からEUまで」、「アジアにおける国際関係への編入」、「主権国家体制のほころびと国際関係の将来」と題する三つのセッション別に日韓双方からの報告と、これに対する討論が行われ、さらには最終日の総合討論に至るまで、活発な議論が交わされました。

初日の11月16日には、一般の聴衆も参加する中で講演会「歴史家の誕生」を開催し、東京大学・成城大学名誉教授の木畑洋一氏と、ソウル大学名誉教授の金容徳（キム・ヨンドク）氏が、歴史研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となったできごとなどについて語りました。

講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、３月中に刊行の予定です。

各セッションではそれぞれのテーマについて意見が交わされました。

「国際関係史・帝国史研究の道」と題し、講演される木畑洋一氏

日　程

●11月16日（金）

日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」

司会：宮嶋博史（成均館大）

日本「国際関係史・帝国史研究の道」
木畑洋一（東京大・成城大名誉教授）

韓国「ある歴史研究者の自述－客観性と普遍性の追求」
金容徳（キム・ヨンドク：ソウル大名誉教授）

●11月17日（土）

【第1セッション　ヨーロッパにおける国際関係の成立からEUまで】

司会：小田中直樹（東北大）

〈報告〉

日本「『複合国家』『複合王政』『礫岩国家』―主権国家の相対化」
中澤達哉（早稲田大）

韓国「近代主権国家の体制形成と進化:国家主権と無政府状態の組織原理」　全在晟（チョン・ジェソン：ソウル大）

〈指定討論〉

韓国 朴檀（パク・ダン：西江大）

日本 皆川卓（山梨大）

【第2セッション　アジアにおける国際関係への編入】

司会：宮嶋博史（成均館大）

〈報告〉

日本「『東方問題』から『朝鮮問題』へ―宗主権をめぐる国際法と翻訳概念―」
岡本隆司（京都府立大）

韓国「帝国の没落 －オスマントルコ帝国と清帝国」
鄭尚秀（チョン・サンス：ソウル大）

〈指定討論〉

韓国 裴京漢（ペ・キョンハン：釜山大）

日本 大河原知樹（東北大）

【第3セッション　主権国家体制のほころびと国際関係の将来】

司会：須田努（明治大）

〈報告〉

日本「西洋列強と『琉球処分』」　ティネッロ・マルコ（法政大）

韓国「東アジア共同体の国家と市民社会　－Civil Asiaへの道」
金泳鎬（キム・ヨンホ：慶北大）

〈指定討論〉

韓国 都珍淳（ト・ジンスン：昌原大）

日本 源川真希（首都大学東京）

●11月18日（日）

【第4セッション　総合討論】

司会：小田中直樹（東北大）、飯島渉（青山学院大）

【参加者】敬称略

日本側（五十音順）

飯島 渉	青山学院大学	医療社会史
板垣 雄三	東京大学	イスラーム学
大河原 知樹	東北大学	中東近現代史
岡本 隆司	京都府立大学	東洋史、近代アジア史
小田中 直樹	東北大学	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
片岡 龍	東北大学	日本思想史、東アジア比較思想
木畑 洋一	東京大学／成城大学	国際関係史
須田 努	明治大学	日本近世史・近代史
恒木 健太郎	専修大学	経済学史・思想史
ティネッロ・マルコ	法政大学	日本近世史、沖縄史、「琉球処分」研究
中澤 達哉	早稲田大学	中東欧近世・近代史
長田 彰文	上智大学	東アジア国際関係史
濱下 武志	静岡県立大学	アジア近代史
松浦 正孝	立教大学	日本政治史
皆川 卓	山梨大学	西洋史、近世ドイツ国制史、近世ドイツ政治理論史
源川 真希	首都大学東京	日本近現代史
宮嶋 博史	成均館大学校	朝鮮史
吉田 光男	東京大学／放送大学	韓国・朝鮮近世史

韓国側（カナダラ順）

金容徳	ソウル大学校／光州科学技術院(GIST)	日本近代史
金泳鎬	慶北大学校／成均館大学校	韓国経済史
都珍淳	昌原大学校	韓国近現代史
朴檀	西江大学校	ヨーロッパ現代史
裴京漢	釜山大学校	中国近現代政治史、政治思想史、中韓関係史
呉定燮	韓国歴史研究院	朝鮮時代史
李泰鎮	ソウル大学校	韓国近世近代史
全在晟	ソウル大学校	国際政治理論、国際関係史、安全保障論
鄭尚秀	ソウル大学校	国際関係史、ドイツ史、帝国主義

都立桜修館中等教育学校の国際理解教育

東京都立桜修館中等教育学校　校長　**鳥屋尾 史郎**

2017年、2018年に「韓国青年訪日団」の高校生学校訪問を受け入れてくださった東京都立桜修館中等教育学校校長の鳥屋尾史郎先生が、同校の国際理解教育についてご紹介くださいました。

● 学校の概要

都立桜修館中等教育学校は、都立大学附属高等学校を母体校として、2006年4月に開校した都内の公立中高一貫教育校です。中高一貫教育校ですので、1年生（中学1年生）から6年生（高校3年生）の生徒が学習しています。校訓である「真理の探究」、「論理を学ぶ学習」、「国際理解」が学校の教育の柱であり「世界の中の日本人としてのアイデンティティをもって国際社会を担う人材を育成する」ことを教育方針としています。

● 国際理解教育の実践例

国際理解教育の具体的な取組として、「第二外国語の学習」「海外語学研修」「海外修学旅行」を紹介いたします。

「第二外国語の学習」は、4年生（高校1年生）と5年生（高校2年生）を対象としています。自由選択科目として開講し、「フランス語」「ドイツ語」「スペイン語」「中国語」「ハングル」から選択しますが、今年度は講師のご都合でスペイン語を開講することができませんでした。水曜日の午後に2時間続きの授業を設定して、各学年半数以上の生徒が学習しています。

第二外国語「ハングル」の特別授業にて、韓国人講師による着付け体験を実施しました。

国際社会で活躍していくためには英語だけではなく、もう一つ言語を習得している必要があることを生徒たちはよく理解しています。外国語を学習することは、その国の歴史や習慣、文化も学ぶことでもあるので、生徒たちのものの見方や考え方が広がっていくという大きな学習成果があります。

「海外語学研修」は4年生を対象として、30名の希望生徒を夏休み期間を利用してニュージーランドに短期留学させています。ニュージーランドには桜修館の姉妹校があり、およそ2週間ホームステイをしながら、姉妹校で現地校生徒と一緒に授業を受けます。また、ニュージーランドからも桜修館に来校し交流を深めています。研修を通してニュージーランドの文化に触れることができるだけではなく、日頃は両親に身の回りのことを全てやってもらっている生徒が、異文化の国の家庭で暮らすことで、自分のことを自分でやるという当たり前のことができるようになり、人間として自立の第一歩を踏み出す良い経験となっています。また、ニュージーランドの生徒たちが来校することで、研修に参加できない生徒たちも異文化体験をすることができる機会となっています。

「海外修学旅行」は5年生生徒全員を対象として、4日間シンガポールに行っています。シンガポールでは現地高校を訪問して交流を行うことや、シンガポール大学の学生と交流を行うなどをしています。異文化の中で暮らす同世代の若者との交流は、たとえ同世代であってもものの見方や考え方が大きく異なることを知るとても良い経験です。

また、今年度の修学旅行はちょうどASEANサミットと日程が重なり、シンガポールが開催地であったため、現地ではアジアの将来像について大いに議論されている最中でした。議論されている内容が日本でニュースを見ているものと全く異質であることに、多くの生徒たちは気が付きました。

● これからの桜修館の国際理解教育

こうした国際理解教育は、生徒たちのものの見方や考え方を変え、広い視野を育てていきます。そして外国語の習得の重要性に気が付いた生徒たちは、とても熱心に英語や第二外国語の学習に取り組んでいます。桜修館では、こうした教育活動を継続していくとともに、さらに海外との交流活動を展開して生徒たちの国際理解を進めていきたいと考えています。

これからは日本国内の大学だけではなく、自分の学びたい分野によっては海外の大学への進学を希望する生徒も増えてくることを予想しています。そのためにも、学校として生徒たちにどんな教育活動を提供するのがよいのか、いろんな可能性を追求していきたいと考えています。

「韓国青年訪日団」来校時の日韓双方の生徒たちの交流活動の様子

PROFILE　鳥屋尾 史郎
（とやお しろう）

東京都立深沢高等学校校長、東京都立工芸高等学校校長等を経て、2018年4月より東京都立桜修館中等教育学校校長に着任した。公立中高一貫教育校において、将来の社会のリーダーとなる生徒の育成に力を注いでいる。

助成事業紹介

東京デスロック+第12言語演劇スタジオ『가모메カルメギ』

東京デスロック主宰　多田 淳之介

東京デスロックと韓国ソウルを拠点に活動する第12言語演劇スタジオの共同製作作品『가모메 カルメギ』は2013年10月にソウルのドゥサンアートセンターのプロデュース作品として製作、上演され、翌2014年の1月には韓国の第50回東亜演劇賞にて作品賞、演出賞、視聴覚デザイン賞の三冠を受賞し、賞歴50年の中で初めての外国人演出家による正賞受賞が話題となりました。2014年秋には北九州芸術劇場、KAAT神奈川芸術劇場にて上演を行い、そして2018年夏、KAAT神奈川芸術劇場、三重県文化会館、AI・HALL 伊丹市立演劇ホール、富士見市民文化会館キラリふじみの4ヵ所を回り、伊丹公演では関西の批評家たちの選ぶ月間賞も受賞し、4年ぶりの日本再演ツアーは大成功に終わりました。

この作品は、第12言語演劇スタジオの代表である作家・演出家のソン・ギウン氏が、ロシアを代表する作家アントン・チェーホフの『かもめ』を1930年代の日本植民地下にある朝鮮半島を舞台に翻案し、私が演出を担当しました。私たちの出会いは2008年のことでした。当時30代前半だった私たちは、国は違ってもお互いの劇団や演劇作品に対する考え方にシンパシーを感じ、日韓演劇交流の新しい姿を目指して長期的に協働することを決めました。この作品は、私たちの活動の一つの到達点でもあります。

『가모메 カルメギ』2018年7月 KAAT神奈川芸術劇場 ©bozzo

日本の植民地時代を描いた作品は、過去にも韓国には数多くあり、日本でもいくつかは作られていましたが、日韓の作家、演出家、俳優が共同で作るということはこれまでありませんでした。日韓の歴史を扱うのはもちろん難しいことで、これが30年前だったら絶対に無理だったでしょう。現在の韓国の文化に触れてきた私も歴史を題材にする難しさを痛感しました。2013年のソウル初演時のリハーサルでは、俳優たちと一緒に日韓双方の資料や映像を見てディスカッションをしたり、感情的な部分も話したりしました。それは双方の観客にとって意義のある作品を目指すためにも大切な時間でした。

この作品の大きな特徴は、植民地時代だけではなく、今日に至る様々な文化交流の歴史も同時に表現しているところです。物語の設定は1930年代ですが、舞台美術として韓国語に翻訳された日本の漫画や小説、K-POPのCDやポスターも設置したことにより、まるで過去と現在を未来から見ているような効果がありました。選曲もK-POPや韓流ドラマの主題歌、日本の曲の韓国語カバーを流し、歴史の勉強ではなく、70年を経て現在の文化交流があるからこそ楽しめる要素を多く取り入れました。

『가모메 カルメギ』2018年7月 KAAT神奈川芸術劇場 ©bozzo

観客の反応は当然日韓で違いますが、現代と歴史を同時に取り扱った点は日韓双方で評価してもらうことができ、チェーホフの名作が日韓の歴史に翻案されたことで、遠いロシアの物語ではなく、私たちの物語として感じることができたという感想も、日韓双方から多くありました。とはいえ、韓国の観客にはまだどこかで日本の演出家が日本を正当化しようとしているのではないかという疑いの目がありますし、日本の観客は初めて見る日本植民地下の朝鮮の物語に、ただただ驚くところから始まります。そういった違いを含みながらも、一つの作品を双方の観客に楽しんでもらえたことが何より嬉しいです。日韓の歴史に関してはまだまだお互いに知らないことも多く、特に現代の人たちがどう考えているのかに対してお互いの誤解も多いと感じます。別の国ですから仕方がない部分もありますが、自分ではない他者への想像力の問題は様々なコミュニティ内でも起きています。

私たちは歴史認識問題を解決するために作品を作っているわけではありません。ただこの問題を考えることを通じて、日韓の相互理解を深めることはもちろん、人と人、自分と他人の関係について多くのことを考えるきっかけになるのではないかと思っています。歴史から学ぶということにはそういう側面もあるのではないでしょうか。

PROFILE　多田 淳之介（ただ じゅんのすけ）

1976年生まれ。演出家。東京デスロック主宰。古典から現代戯曲、ダンス、パフォーマンス作品まで幅広く手がけ、韓国、東南アジアとの共同製作も多数。2010年には国内最年少で公立劇場の芸術監督に就任。2014年『가모메カルメギ』にて第50回東亜演劇賞演出賞受賞。東京芸術祭APAFアジア舞台芸術人材育成部門ディレクター。

企画公募事業紹介

生涯スポーツで街を元気に！地域づくり魅力発信事業

公益社団法人　北海道国際交流・協力総合センター　小田島 道朗

北海道には、当地発祥のスポーツが数種あり、「ミニバレー」もその一つです。1972年に大樹町で考案され、バドミントンのダブルス用コート（ネット高はポスト部分で155cm）、ビーチボールのような柔らかいボールを利用し、4人対4人でボールを打ち合うスポーツです。全日本ミニバレー協会のスローガンは「であい・ふれあい・わかちあい」であり、小さい子どもから高齢者まで、幅広い年代が楽しめる生涯スポーツとされています。

ミニバレーボール公式球

北海道庁は、東アジア地域の著しい経済発展、また韓国との関係の密接化を踏まえ、「日韓友情年」にあたる2005年より、韓国第2の都市・釜山広域市との交流趣意書への調印をはじめ、慶尚南道、ソウル特別市、そして済州特別自治道と友好提携を結び、韓国諸地域とのつながりが拡がってきています。また、北海道国際交流・協力総合センター（ハイエック）も北海道庁と軌を一にし、韓国・友好提携地域との交流にも取り組んできたところです。

掲題の事業は、高齢化社会において高齢者の社会参画を促し、健康寿命を延ばすことで地域活性化を図る特色のある地域づくりの一例として、北海道発祥の生涯スポーツ「ミニバレー」を韓国の大学生に紹介し交流することを目的としています。今回は、北海道庁の全面的な協力のもと、10日間の日程で道内の大学生20名が韓国を訪問することになりました。なお、ミニバレーを交流の主軸としたことから、学内にミニバレーサークルを擁し、活動も大変熱心で交流実績のある北翔大学の学生を選抜し派遣することとしました。

11月21日にオリエンテーション、北海道庁、駐札幌大韓民国総領事館への表敬後、ソウルへ向け出発。翌日午前にはソウル特別市を表敬訪問し、早速その日の午後にソウル市立大学校の学生とミニバレー交流が行われました。

ソウル市立大の学生とのミニバレー交流を終えて

ソウル市立大学校には日本語学科がないにもかかわらず、日本語を勉強している学生も多い様子で、積極的に交流会に参加して下さり、北翔大学の学生が作成した北海道の概要やミニバレーについてのプレゼンテーションに熱心に耳を傾け、ディスカッションも大いに盛り上がっていました。その後、体育館へ移動し、北翔大学の学生から競技についてのデモンストレーションを行い、最後には参加学生全員が日韓混合4チームに分かれ実際のゲームを体験しました。ソウル市立大学校の学生も夢中になってプレーしており、日韓の学生が言葉の壁を越えて相互にコミュニケーションを取りながら交流している姿が印象的でした。

韓国初のミニバレー連盟がある慶尚南道を訪問した際にも、慶南大学校の学生とミニバレー交流を行っており、ソウル同様、日韓の学生間で大変な盛り上がりを見せました。また、その後の夕食交流会では、ミニバレーなどの交流を介したこともあり、以前からお互いを知っていたかのような雰囲気で学生同士の会話も弾み、大変和んだ時間が流れました。

慶南大で行われたミニバレー交流の様子

韓国滞在期間中には、ソウル市でホームステイも体験しました。各家庭で愛情たっぷりの韓国ならではのもてなしを受け、観光では体験できないより深い文化を学ぶとともに、韓国の歴史や文化に関する施設の視察や企業訪問など、充実した10日間の日程を終え帰国しました。

【北翔大学参加学生の感想など】

○韓国のみなさんの温かさに触れ、感動しました。ホームステイ先の家族や交流で友達になった学生たちと共に過ごす時間は短かったですが、別れるのがとても寂しく名残惜しかったです。言葉が分からない中で、思いが通じた時の嬉しさは今でも忘れられません。SNSで今もつながっている方がいるので、これからも交流し、次に韓国へ行くときには韓国語を話せるようになってまたみんなに会うのが夢です。

○私は学生のリーダーとして参加しました。大学生交流では訪問先の学生リーダーのプレゼンに圧倒され、自身の実力不足も思い知り、自分を見つめ直す機会にもなりました。日韓の関係はより多くの若者同士で交流を深めることによって、より良いものになると思います。今回できた繋がりを絶やすことなく、これからも韓国の方と関わり、今後は次世代の若者同士が交流できる場を提供していく活動がしたいと思います。

○自分が今まで見てきた小さな世界の中で作り上げられた固定概念により、世界の国々の人たちの文化や習慣について決めつけた考え方をしていました。韓国において、人々の温かさや日本と韓国の互いの文化を尊重している人々が多くいるという良さがあると思いました。このように互いの国の良さを認め合う考え方が広まっていくことにより、さらに良い日韓交流ができていくのではないかと考えました。

PROFILE　**公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター**

1971年に北海道と北方圏諸国との交流を目的に「北方圏調査会」として設立、1978年に「社団法人北方圏センター」への発展的改組を経て、平成23年に公益社団法人として現団体名へ改称し現在に至る。北海道との友好提携にある各国・地域を中心とした交流事業や国際協力に取り組むとともに、多文化共生事業も実施している。昨年度より、北海道庁と連携の上JENESYS企画競争公募事業を実施。北海道と4つの友好提携地域間の大学生交流において、北海道の特色を発信する交流事業を実施している。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2018年度第3四半期（2018年10月1日から12月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国青少年訪日団（第1団）	鄭鎭保（チョン・ジンボ） 河南高等学校　校長	50	21	29	10/18～10/24	新潟県立十日町総合高等学校、新潟県（小千谷市、十日町市）、群馬県甘楽郡、埼玉県川越市
韓国青少年訪日団（第2団）	尹英愛（ユン・ヨンエ） 京畿道教育庁　奨学士	48	19	29	10/18～10/24	秋田県立角館高等学校、秋田県(男鹿市、仙北市)
国際ポエトリー交流プログラム(IPEP)訪日団	朴恩姫（パク・ウンヒ） 豊山高等学校　教諭	12	4	8	10/29～11/6	沖縄県立首里高等学校、沖縄大学、沖縄県（那覇市、糸満市、中頭郡読谷村）
韓国青少年訪日団（第3団）	李惠順（イ・ヘスン） 龜巖高等学校　校長	69	27	42	11/8～11/14	東京都立杉並総合高等学校、東京都立桜修館中等教育学校、埼玉県(秩父郡、川越市、日高市)、群馬県甘楽郡
韓国青少年訪日団（第4団）	劉煥連（ユ・ファンヨン） 徳荘中学校　校長	29	7	22	11/8～11/14	東京都中央区立佃中学校、埼玉県（秩父郡、川越市、日高市）、群馬県（甘楽郡、北群馬郡）
アジア国際子ども映画祭参加訪日団	李京和（イ・キョンファ） 梅香女子情報高等学校　教諭	10	5	5	11/20～11/26	北見藤女子高等学校、北海道(札幌市、小樽市、北見市、網走市)

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本青少年訪韓団（第1団）	三浦 顕悟 岩手県教育委員会事務局学校教育課　指導主事	50	7	43	10/21～10/27	徳成女子大学校、龜巖高等学校、ソウル特別市、京畿道（水原市、城南市、坡州市）
日本青少年訪韓団（第2団）	譜久村 史奈子 沖縄県教育庁県立学校教育課 指導主事	50	4	46	10/21～10/27	甫羅高等学校、晋州教育大学校、ソウル特別市、京畿道（水原市、城南市、龍仁市）、全羅北道（全州市）、慶尚南道（山清郡、晋州市）、釜山広域市
日本青少年訪韓団（第3団）	前田 洋明 北海道札幌西高等学校　教諭	69	18	51	11/4～11/10	河南高等学校、ソウル特別市、京畿道(城南市、河南市、坡州市)
日本青少年訪韓団（第4団）	谷 範浩 高知県黒潮町立佐賀中学校　校長	30	12	18	11/4～11/10	徳荘中学校、ソウル特別市、京畿道（義王市、城南市、水原市、龍仁市、坡州市）

韓国青少年訪日団（第1団）
着物着付け体験

韓国青少年訪日団（第2団）
なまはげ体験

国際ポエトリー交流プログラム（IPEP）訪日団　ポエトリー交流

韓国青少年訪日団（第3団）ホストファミリーとのお別れ

韓国青少年訪日団（第4団）中央区立佃中学校訪問

アジア国際子ども映画祭参加訪日団　アジア国際子ども映画祭本選大会

日本青少年訪韓団（第1団）ホームステイ解散式

日本青少年訪韓団（第2団）韓服体験

日本青少年訪韓団（第3団）河南高等学校訪問　北海道の伝統舞踊を披露

日本青少年訪韓団（第4団）徳荘中学校訪問　協同授業

❷ 学術定期刊行物助成

『韓国朝鮮の文化と社会 第17号』（韓国・朝鮮文化研究会編、風響社）
『現代韓国朝鮮研究 第18号』（現代韓国朝鮮学会編、中西印刷）

国際ポエトリー交流プログラム（IPEP）訪日団

2018年11月1日に沖縄県那覇市で開催された、詩を通して文化交流を行う国際ポエトリー交流プロジェクトにあわせ、韓国の高校生12名が8泊9日の日程で訪日しました。一行は、日本・米国・フィリピンの学生と共にポエトリー交流に参加した他、東京では日本理解のための講義や視察、沖縄では学校訪問やホームステイ、文化体験などを行いました。

沖縄で行われたポエトリー交流では、今回のプロジェクトを呼びかけたキャロライン・ケネディ前駐日米国大使も出席する中、各国からウォームアップとして1名、本選では5名が母語で詩の発表を行いました。内容は日々の出来事や政治、自国の文化や愛をテーマにしたものなどさまざまで、各々の中にある感情や想いを詩に込めて表現していました。

日程の終盤に行われた成果報告会では、今回のポエトリー交流と訪日体験についての発表を行いました。韓国の代表は「日米比の友人との間に生まれた絆は宝物です。詩を詠む言葉は違っても、その詩に込められた思いを感じることができました。違いがあっても団結して、美しく、互いに思いやり、慈しむ仲間を作ることができました。言葉の違いは決して壁ではありません。それは新しい学びへの招待状なのです」と交流の感想を述べていました。

韓国青年訪日団団員と日韓未来塾メンバーとの交流

2018年度の日韓文化交流基金主催大学生訪韓団に参加した濱邊翔哉さん（長崎大学3年、2017年度日韓未来塾参加者）からの、「韓国の大学生訪日団が長崎を訪問する際には、長崎県主催の『日韓未来塾』※メンバーとの交流が可能かもしれない」という話をきっかけに、2019年1月に同県を訪れた韓国青年訪日団（第4団、第5団、計60名）と、長崎県内の大学生を中心とする日韓未来塾のメンバー等20名との2日間にわたる交流が実現しました。交流の様子と日韓双方の参加者の感想を紹介します。

※日韓未来塾とは、2013年より長崎県が実施しているプログラムです。日韓の若者が、互いの国について理解を深めるとともに、両国間の交流方策について議論し、企画・立案作業を通じて、未来の長崎と韓国との交流を担う青少年を育成し、今後の友好促進につなげることを目的としています。2018年には、日本と韓国の大学生約50名が参加し、釜山広域市・対馬市・長崎市でプログラムを実施した他、中国の大学生も含めた「日中韓トライアングル交流」も行っています。

【日程】

［1月17日（木）］

長崎県庁表敬訪問、講義「長崎県の魅力と歴史、国際交流について」、歓迎昼食会（ここから日韓未来塾の学生も合流）、長崎平和公園・原爆資料館（市民ガイドが案内）、稲佐山見学

歓迎昼食会で日韓双方の参加者が対面

長崎平和祈念像の前で

市民ガイドの方の案内で平和公園と原爆資料館を見学

長崎市内を一望できる稲佐山にて

［1月18日（金）］

「日韓未来塾」学生とのフィールドワーク（大浦天主堂、グラバー園、出島等）、ディスカッション、報告会

長崎市内でのフィールドワークの様子（出島）

交流の最後のプログラム、グループディスカッションでは、核兵器に関する問題や今後の長崎市の観光プラン、朝鮮通信使などをテーマに話し合いを行いました。

【参加者の感想】

大邱大学校3年　金址厚（キム・ジフ）さん

○私がフィールドワークとディスカッションで一番心配したのは言葉でした。しかし日韓未来塾の参加者は韓国についての感心が高く、韓国語も上手で、私の心配は一瞬で消えました。良かった点は、長崎に住む学生と、地元の有名なお店やお勧めの観光地をフィールドワークで回れたことです。討論では日本人が考える日本と韓国について、多くを学ぶことができました。私の住む釜山に近い長崎と福岡に友達がたくさんできたので、今後も彼らと連絡を取り、交流を続けるつもりです。

東亜大学校2年　鄭珍容（チョン・ジンヨン）さん

○ぎこちない雰囲気の中で始まった昼食会、さらに言葉まで違い、最後の討論まで何一つ馴染みのあることはありませんでした。しかしそれは重要ではありませんでした。お互いが純粋に友達になろうと相手に近づくために努力をし、討論では互いの国の状況を客観的に見て、意見を調整しました。ともすると敏感になりがちな状況でもお互いに配慮し、討論は成功裏に終わりました。いっしょに過ごしたのはわずか二日間でしたが、一生の友達ができる素晴らしい時間になりました。

長崎大学3年　濱邊翔哉さん

○私がこれまで参加した日韓未来塾と日韓文化交流基金の活動が一つになり、長崎で日韓の学生の交流が実施できたこと、そして今まで点と点だった様々な活動が、今回のような一つの線になったことがとても嬉しかったです。中でもディスカッションでは、参加者の発表がそれぞれに個性があり充実したものになったことがとても感動的でした。

長崎大学4年　平野奈津子さん

○私たちはグループディスカッションで日韓の関係についても話しました。その際に、互いの国の立場や、自分自身の考えを正直に話しました。現在もあまり良いとは言えない関係のため、お互いの主張は対立することもあり、私自身も重く感じることもありました。しかし、話し合いの着地点を見つけ、相手のことをより深く理解することができたように感じました。

表紙作品紹介

「日韓交流おまつり in Tokyo」での書家・濱﨑道子氏と来場者のコラボレート作品

タイトル：「平和―書を通じてみんな仲良く」

2018年9月に東京・日比谷公園を会場に開催された「日韓交流おまつり in Tokyo」での書道パフォーマンスで、書家・濱﨑道子氏と来場者によってつくられたコラボレート作品「平和―書を通じてみんな仲良く」が、国立新美術館で開催された「第16回アジア創造美術展」（主催：国際墨友会、会期：2019年1月23日～2月4日）において展示されました。